茶の都しずおかが誇る世界へ向けた情報発信拠点！
ふじのくに茶の都ミュージアムがオープン

ふじのくに茶の都ミュージアムが3月24日、静岡県島田市に開館した。同館は、本県が策定した「茶の都しずおか構想」の拠点として、博物館、茶室、庭園、商業館から成るお茶の専門的な総合施設で、旧「島田市お茶の郷」を全面的にリニューアルしたものだ。同館のキャッチコピー「お茶の未来はここから始まる」という言葉に託された理念やビジョンを紹介する。

情報の集積と発信

平成26年に策定された「茶の都しずおか構想」は、本県のお茶に関する資源を生かして、静岡茶のブランド確立を図り、お茶のある健康で豊かな暮らしの実現を目指すプロジェクトだ。「ふじのくに茶の都ミュージアム」は、その拠点であり、本県の茶業・観光の振興に寄与する施設として整備された。

館内には、世界の茶文化を視覚的に紹介する展示に加え、本県茶業の発展史、県内茶産地、茶草場農法（世界農業遺産）、茶の機能性等を紹介するコーナーがある。来館者にお茶を五感で感じてもらう仕組みとして多彩な体験プログラムも用意されている。また、国内外の茶業関係者やお茶愛好者を対象にした研修会も開催する予定。それらの交流を通じて幅広い情報の集積や発信を行っていく。また、次世代へ「茶の都しずおか」を語り継ぐため、平成28年12月に制定された「静岡茶愛飲促進条例」に基づき、学校を対象にした出前授業等の館外活動にも力を入れ、拠点としての基盤を支えていく。

静岡茶の未来像を提案

同館は、世界の中の静岡茶を時間軸に沿って丁寧に解説しているが、それを踏まえた上で、「お茶の新時代」という展示ゾーンを設け、今後の静岡茶がどうあるべきかという未来像についても提案を投げかけている。例えば、健康という視点からお茶の機能性に着目した商品、お茶の香りを抽出した香水、ワインボトルに入った高級ボトリングティー、世界で販売されている珍しいパッケージの茶商品などの展示は、従来の概念に縛られない自由で斬新な議論を促す。そのことが新たなお茶ファンの創出や、未来に向けた新たなビジネスモデルの提案につながり、同館が掲げるキャッチフレーズ「お茶の未来はここから始まる」を体現することになる。

緑茶の香りを抽出した天然緑茶香水を紹介した展示。お茶の新しい世界を提案している。

来館者を迎える現代的な中庭は、世界的な庭園デザイナー石原和幸氏の作品。奥に広がる日本庭園との違いも楽しめる。

昭和30年代の製茶機を展示した「製茶小屋」。各工程で使用される機械の動きを映像で解説している。

ミュージアムショップやカフェに並ぶアイテムにも伝統と革新が息づき、過去と未来が美しく調和するイメージがある。その意味で同館は、茶業や観光に寄与し、静岡県の誇りとなる新たな拠点になる。

静岡を日本の原動力に

同館の館長であり、歴史学者（日本文化史・茶道史）の熊倉功夫さんは、茶の都ミュージアムの出発点を次のように語る。「お茶は、日本の日常を支える文化の根幹です。にもかかわらず、それを体系的にしっかり解説できる博物館は、これまで国内にありませんでした。どんなお茶が、どの地域で、どのように飲まれてきたのかを、克明に学べる施設がなかったのです。視野を世界に広げてみても、同じことが言えます。お茶は、世界史を動かしたことがたびたびあり、時には戦争の要因にもなりました。ところが、世界各地で、お茶がどのように飲まれてきたのか、あるいは、どんな文化を形成してきたのかを、総合的に理解できる施設がないのです。そこで人類にとってのお茶とは何かを、改めて整理し、見つめ直そうというのが、当ミュージアムの出発点です」。

「一方で静岡は、茶処として日本を支えてきた側面がありました。中でも明治期における静岡のお茶は、主要な輸出品として外貨獲得に貢献し、日本近代化の原動力になりました。その歴史を踏まえた上で、これからの静岡は、何をアピールすべきなのか。お茶の機能性なのか、楽しみ方の提案なのか、それとも急須文化の発信なのか。世界へ向けて発信すべきことは、いくつもあります」。

「私と静岡のお付き合いは、20年以上になりますが、静岡の人は、時代の変化に対して、決して敏感ではありません。情報発信という面においても不得手な印象があります。おそらく、自然、文化、交通など、いろいろな面で恵まれているからでしょう。ところが、ものづくりや医療の分野などでは、とてもユニークな創造性を発揮し、世界を驚かせる力を持っています。現在、静岡のお茶は、世界の中でどうあるべきかが問われ、相応のスピード感を持って対応すべき時を迎えています。そんな状況の中で、茶の都ミュージアムが開館しました。これは大きなチャンスであり挑戦です。ミュージアムが世界へ向けた情報発信の拠点になれば、静岡は再び日本の原動力になり得ます。その可能性は十分にあり、またそうしていかなければならないと思います」。

Data

ふじのくに茶の都ミュージアム
静岡県島田市金谷富士見町3053-2
0547-46-5588 https://tea-museum.jp

［開館時間］9:00～17:00（入館は16:30まで）
［休館日］火曜（祝日は開館、翌平日休館）
［観覧料］一般300円（大学生以下及び70歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料）
東名高速道路相良牧之原ICから車で10分。
新東名高速道路島田金谷ICから車で13分。
JR東海道線金谷駅からバス又はタクシーで5分。

茶の都ミュージアムの館長、熊倉功夫さん。「このミュージアムが静岡ならではの情報発信と吸引力を持った施設に育ってほしい。」と語る。

池を中心に園内を回遊して鑑賞する「池泉回遊式・舟遊式庭園」。江戸時代の大名茶人・小堀遠州の庭園を復元している。

中国の茶楼「湖心亭」を再現した展示。3階ではお茶の起源とされる中国雲南省をはじめとした世界のお茶と民族文化を紹介。